カタブイ、1972

作・演出　内藤裕子

２０２２年　復帰 50 年企画・共同制作

上演台本

スタッフ

作・演出　内藤裕子
美術　吉野章弘
照明　佐々木真喜子
音響　穴沢淳
衣裳　樋口藍
舞台監督　猪股孝之
演出助手　鍋嶋大輔
イラスト　伊波二郎
宣伝デザイン　小田善久
企画制作　下山　久
名取敏行
制作（沖縄）　大城安恵
友利奈緒子
比嘉千賀子
橋本　聡
（東京）　栗原暢隆
松井伸子

舞台手話通訳　南瑠霞ほか（手話あいらんど）

助成　文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会

主催　一般社団法人エーシーオー沖縄
名取事務所

沖縄公演
二〇二二年十一月三十日㈮～十二月四日㈰ひめゆりピースホール

東京公演
二〇二二年十二月十五日㈭～十二月十八日㈰下北沢小劇場Ｂ１

登場人物

波平誠治　(73)　サトウキビ農家・タクシー運転手　田代隆秀
石嶺和子　(49)　誠治の長女　中学教師　馬渡亜樹
石嶺信夫　(51)　和子の夫　建設業者　当銘由亮
石嶺恵　(22)　信夫、和子の娘　大学生　増田あかね

杉浦孝史　(22)　本土から来た大学生　山田定世

当山ユミ　(34)　バー従業員　古謝渚

時
1971年〜1972年

場所
沖縄県中部・波平家

プロローグ

１９７２年、５月１５日。
雨が降っている。
合羽をきて雨に打たれながら、佇む人たち。
手にはプラカード、幕。
そこには「１９７２年５月１５日」「復帰反対」の文字。
波平家の居間では一人、居間で誠治がラジオを聴いている。
そこから聞こえるのは佐藤栄作の声。

ラジオ　「本日、天皇皇后両陛下のご臨席を仰ぎ、アグニューアメリカ合衆国副大統領はじめ、内外貴人多数のご参列を得て沖縄復帰記念式典を挙行致します事は私の深く喜びとするところであります。沖縄は本日祖国に復帰いたしました。私はまずこのことを過ぐる大戦において尊い犠牲となられた幾百万の御霊に謹んでご報告いたしたいと思います。大戦の末期に戦場となり、尊い多くの人命を失った沖縄の地は、戦後長きにわたって米国の政権下に置かれてきたのでありますが、今日以降私たちは同朋合いよって喜びと悲しみをともに分かち合うことが出来るのであります。」

暗転。

暗転の中、昭和天皇の声。

ラジオ　「沖縄県民の受けた大きな犠牲を悼み、長い間の労苦を心から労うとともに、今後全国民がさらに協力して平和で豊かな沖縄県の建設と発展のために力を尽くすよう、切に希望します。」

その後響く「日本国万歳！」「万歳！」「万歳！」の声。

第1場

１９７１年１２月。夕方

波平家の居間。中庭と前には縁側。正面奥に仏壇。電話。

下手奥に行くと、台所などがある。真ん中に座卓。その上には新聞、など。

ジェット機の轟音。

轟音を気にする様子もなく、中庭からクバ笠を手に、首にタオルをかけた誠治が入ってくる。

作業着姿。長靴を履いている。縁側からあがると、そのまま奥へ。

そのあと、弁当箱やらクバ笠を手に作業着のユミが入ってくると、

縁側に寝転がる。

ユミ　はー。（と伸び）

誠治　（笠をとり戻ってきて）疲れたね

ユミ　ううん、ねー、今日すごく捗ったね

誠治　ユミのお陰さ、流石だよ

ユミ　誠治さんの教え方が上手いからさ
誠治　子供の時にやった事あるからだね、カンがいいよ
ユミ　そうかなー、確かに、そうかもねー
誠治　削る手つきがいい。いきなり、ああはいかないよ。
ユミ　すぐ褒めるー、調子に乗るよ
誠治　ホントの事だからさ
ユミ　今日のお弁当おいしかったね？
誠治　美味しかったよー
ユミ　サトウキビ畑で食べるお弁当ってなんであんなに美味しいんだろうねー・・・だけどユミはホントに料理が上手だよ
誠治　また褒めるー
ユミ　そんなに褒めてるかね？
誠治　うん、でもそこが好き
ユミ　（照れつつ）よしもっと褒めよう
誠治　もういいよー
ユミ　ええと、

間

ユミ　え、もう褒めるとこなくなってる
誠治　・・・無理は良くないね、
ユミ　それはそう

ジェット機の音

ユミ　今年のキビ、やっぱり良くない？
誠治　うん、旱魃あって、そのあと台風。細かったでしょう
ユミ　そうだったね
誠治　いつもの三分の一は少ないよ、
ユミ　そんなに？
誠治　うん、だから今年は一人でコツコツやろうと思って
ユミ　いくら何でもそれは無理だよ！　製糖工場閉まっちゃう。
誠治　年が明ければ手伝ってくれる人もいるからね、皆忙しそうだし
ユミ　え、嫌だってお婿さん？　信夫さんだっけ
誠治　そうじゃないけどね、皆自分たちの仕事があるから
ユミ　お孫さんは？　恵さん
誠治　恵は去年も帰らなかったしね、今年も帰らないんじゃないかな
ユミ　冬休みなのに

誠治　いろいろ忙しいだろうし、帰るのも大変だからね。
ユミ　そうかー、こっち来るのに手続きが
誠治　うん、だから無理することないって手紙でも言ってやったんだ
ユミ　来年には、いらなくなるんだね、パスポート
誠治　うん
ユミ　すごい、そしたら私も行ってみたいなー、ヤマト。誠治さんいったことあるの？
誠治　ないよー
ユミ　ね、東京だっけ？
誠治　ん？
ユミ　お孫さんの大学
誠治　そう
ユミ　わー！　東京の大学だなんて、優秀なんだね
誠治　そんなんでもないよ、沖縄の枠もあるし
ユミ　へー枠。そんなのあるんだ
誠治　そう
ユミ　やっぱり学校の先生になるの？
誠治　どうだろう、
ユミ　そうなるよ、娘も先生、孫も！　凄い。
誠治　ユミだってすごい、立派に働いてる。

ユミ　また褒める、凄くないよ、やめて。
誠治　一人で立派にやってる。キビ削るのもうまい。
ユミ　（照れて）島だとね、牛が絞ってたの
誠治　うん、この辺も昔はそうだったよ、グルグルと回って
ユミ　そうそう、へー、ここら辺も
誠治　皆で小屋持っててね
ユミ　うちもそうだった。みんなで助け合ってたの
誠治　そう
ユミ　私、終わるまで手伝っちゃダメ？
誠治　ん？
ユミ　迷惑？
誠治　そんなことないよー、じゃあ、そうしてもらおうかな
ユミ　やるやる！
誠治　うん。
ユミ　うん。工場閉まっちゃうのっていつ？
誠治　いつもなら三月末かな
ユミ　早まるの？
誠治　今年は不作だからね、工場の運転も８割にしてると言ってたよ。
ユミ　機械でやるって言ってもキビは年によって出来が違うもんね、大変だ

誠治　牛の方が良かったんじゃないかと思う時もあるよ。キビがらと草食べさせてれば燃料もいらないし

ユミ　そう？

誠治　うん。大変だったけどね、

ユミ　そうだよー、どっちも大変って事か

誠治　そうそう。さあ、晩御飯なにがいいかねー

ユミ　私するよ、

誠治　そうかね？　とりあえず着替えよう、

ユミ　そうだね

と言いあいながら奥へ。

と、杉浦を伴って信夫が下手前から入ってくる。

杉浦はリュックサックを背負ってビーチサンダルを履いている。

信夫　お義父さんー、いるかねー

間。

信夫　あれ、お義父さんー

と、縁側から上がり、奥を見に行く。

信夫　いないかな・・・

残された杉浦は家を見まわしたり。と信夫戻ってきて

信夫　杉浦君、
杉浦　はい、
信夫　とりあえず、あがって
杉浦　いいんですか
信夫　大丈夫、とりあえず、
杉浦　はい、お邪魔します。
信夫　その辺座って。畑に居なかったからね、
杉浦　ええ
信夫　いると思うんだけど

信夫奥へ再び行こうとする。
と、誠治がやってくる。

誠治　信夫
信夫　お義父さん
誠治　どうした、
信夫　いや、
誠治　その人、誰かね
信夫　いや、
杉浦　あの、突然お邪魔しまして、すみません。杉浦孝史と言います。
誠治　杉浦さん
信夫　（杉浦に）言ってた、嫁のお父さん、義理の親父。
杉浦　はい
誠治　それで？
信夫　ヤマトから来られてて、なんていうの、放浪？
杉浦　いえ、貧乏旅行。
信夫　とにかく一人旅、してるんだってさ、
誠治　そうー、
杉浦　返還前の沖縄に是非来たかったんです
信夫　桜坂であったんだけど、
誠治　ああ

信夫　金が無いらしくて、どこか働かせてもらえるとこないですかっていうんで
杉浦　サトウキビの収穫の時期って聞いて、もし働かせてもらえるなら、
誠治　だけど今年は不作で…和子に言ったけど、聞いてない？
信夫　うん、それは聞いてた、
誠治　まともに給料なんか払えないから、
信夫　それは別に
杉浦　はい、むしろサトウキビの収穫、やってみたいと思ってたんです
誠治　別に面白いもんでもないですよ、キツイし、単純作業だから、
信夫　俺もそれは言ったんだけど、

と、ジェット機の音

杉浦　すごいですね、ファントム？
信夫　B52（ビーゴーニ）
杉浦　分かるんだ
信夫　そりゃね
杉浦　（音が遠ざかるのを待って）何度聞いても慣れないです
信夫　俺たちだって慣れないですよ、
杉浦　慣れないもんですか

信夫　そりゃあね。
杉浦　・・・何年前でしたっけ、Ｂ５２（ビーごじゅうに）が落ちたの。
信夫　４年前。
誠治　ああ（と座卓の前に座って老眼鏡をかけると、新聞を広げて読み始める）
信夫　朝の４時過ぎだったかね、ウチも揺れた
杉浦　ええ？
信夫　ここもだったね、お義父さん
誠治　ああ
信夫　空が赤くなって、
杉浦　わー
信夫　とうとう戦争が始まったと思った
杉浦　そんなに
信夫　そうそう、避難しようって、荷物まとめたり。機体の破片も降ってきたしね、家の窓ガラスが割れたところも随分あった。ウチは大丈夫だったけど。
杉浦　はー、
信夫　だからね、いつだって怖い。
杉浦　はい、
信夫　いつもね。平気な人なんていないよ。
杉浦　うーん、

信夫　お義父さん、
誠治　はい
信夫　怒ってますか
誠治　何を
信夫　いや、いろいろ、この間、土地の事とか、余計なこと言ったから
誠治　心配していってくれたんでしょ、分ってるよ
信夫　俺も相談されたりして、ちょっと、
誠治　いいよ、

間。

と、信夫、杉浦のぼんやりした様子に気が付いて

信夫　あ、杉浦君の手伝いは、
誠治　いや、いいんだ、手伝いの人も頼んだし
信夫　え、ホントに
誠治　うん、
信夫　どおりで進んでた
誠治　だろう。

間。

杉浦　あの、ダメならダメで大丈夫なんで、
信夫　なんで、大丈夫じゃないでしょう、お金ないのに
杉浦　まあ、野宿したり、慣れてるんで
信夫　いやー、危ないよそれは
杉浦　そうですか
信夫　そうでしょー
杉浦　でもでも、（誠治に）ホントすみません、図々しく押しかけちゃって
誠治　いやいや

「只今―」と恵の声
と、旅行鞄を持った恵。

信夫　え？　恵？
恵　　え？　お父さん、どうしたの
信夫　恵、帰ってくるなら知らせてよ
恵　　いいでしょ、別に
信夫　お母さん知ってるの

恵　　え？　何も言わなかったけど、年末、実家帰ってくるのに知らせなきゃいけないの？
信夫　そりゃ、そうだよ
恵　　いいよ、もともとおじいの家でキビ手伝うつもりで帰ってきたんだから
誠治　（恵に）お帰り
信夫　お義父さん知ってたの、恵帰ってくるの
誠治　知らなかったよ
恵　　え？　ごめん、知らせた方が良かった？
誠治　いい、いい。

杉浦は恵をみて驚いたようだが隅で小さくなっている。

信夫　だって、2年ぶりに帰ってくるのに
恵　　いいでしょ
信夫　いいでしょって

と、恵は居間に上がるとお土産を仏壇に。線香をあげ手を合わせる。
皆、なんとなく見守る。

恵　　（誠治に）去年はごめんね、今年は最後まで手伝うから

誠治　・・・
恵　あれ？　どうしたの
誠治　いや・・・あのさ
恵　（と、杉浦に気が付いて）え？
杉浦　（恵に）うん。
信夫　杉浦君、杉浦孝史君。
杉浦　・・・（と、恵に頭を下げる）
信夫　娘の恵です。
杉浦　はい。
恵　（杉浦に）どうしているの、ここに
杉浦　たまたま、というか、ビックリした。
恵　本当にたまたま？　そんなことある？
信夫　え？　知り合い？
恵　まあね、東京で。
杉浦　ええ、そうなんです。
信夫　ええ？　ああ、言ってたね、友達に沖縄の子がいるって、恵の事だったんだ
杉浦　はい。
信夫　えー、奇遇だねえ、
恵　結局、どういう

杉浦　あ、たまたま飲み屋で一緒になって、その、信夫さんと、それでキビの収穫を
恵　働くの？
杉浦　それが、どうも、手は足りてるということで…
恵　（誠治に）足りてるの？
誠治　足りてるといえば足りてるし、（急に立ち上がって）まあ、とりあえず、皆、一度、帰ったら？

間。

恵　迷惑だった？　急にきて
誠治　そんなことない、久しぶりに恵の顔見られて嬉しいよ、ただ、今年も帰ってこないだろうと思って、手紙書いても返事がないし
恵　うん、ごめん…今年は不作って
誠治　そう、だから、手伝いはいらないというか。
恵　でも不作って言ったって、立ち腐れにするわけ行かないでしょ、結局倒さなきゃいけないんだったら
誠治　そうだけど、まあ、せっかく帰ったんだから、家かえって、のんびりすればいいよ
恵　ここに泊まっちゃダメなの？
誠治　そんなことはない、でも、ほら、和子だって心配してるし、顔見せた方が

恵　あの人は興味ないでしょ、生徒にしか

誠治　恵、あのね

と、着替えたらしいユミが居間を心配そうに覗く姿に、誠治が気づく

誠治　あ、

恵　何？

誠治　いや、和子はさ・・・・

と恵、振り向く

と、ユミは隠れるが見つかってしまう

恵　え？

ユミ　こんにちは

恵　こんにちは

間。

恵　え？

信夫　え？　あれ？

間。

誠治　いやいやいや。
信夫　なになになに。
誠治　いやー、あはははは、（と笑う）
信夫　なになになによー
誠治　まあ、座りましょうかね、立っているのもナニだから。

と誠治座る

誠治　で、杉浦さんは学生さんですか？
杉浦　え？　まあ、
誠治　恵と同じ大学？
杉浦　いえ、アルバイト先が一緒で
誠治　そうですか、
恵　今はもうやめたけどね
誠治　そう、ん？　学校？

杉浦　いや、アルバイトを、あ、大学も今、休学中で
誠治　そうですか、
杉浦　まともに授業も受けられないし、いろいろあってまあ、
誠治　そうでしょう、色々ありますよ、それは。生きていれば。

と、信夫がユミに近づいて。
ユミもそのまま出ていくこともできずに。

信夫　（ユミに）あの、ワタシ、娘婿の、
ユミ　信夫さん
信夫　はい、信夫です。
ユミ　当山ユミです。
信夫　ユミさん
ユミ　ハイ、お父さんにはお世話になってます。
信夫　お世話・・・？
誠治　信夫、勝手に話しかけないで、ユミは別にそういうアレじゃないから。
信夫　ユミ・・・
ユミ　誠治さん、
信夫　誠治さん・・・

ユミ　すみません、私、
誠治　キビ倒し手伝ってくれてるの、それだけさ、
信夫　ああ…（ユミに）そうなんですか
ユミ　あ、はい、そうです、何かこそこそしたから変な風になって、ごめんなさい
信夫　いえ、それはいいんですけどね
誠治　分かった！　皆でやろう。キビ。ね、恵も。ほら、杉浦君も泊まればいいよ、恵のお友達じゃね、断るわけにもいかないですよ、それは。
信夫　え？
誠治　狭くて汚いとこだけど、ね、

音楽。
暗転。

第2場

1場から10日間ほど後。
同じ居間。三線が置いてある。
さんぴん茶を飲みながら、和子と信夫が話している。

和子　あやしい、やっぱりあやしい。
信夫　そうなんだけど、でも、考えればお義父さんだって、大人だし、ユミも大人でいい子だし。
和子　ユミ
信夫　うん、ユミ。ユミちゃん。ユミさん。
和子　……
信夫　二人とも、一人身なんだから
和子　だって、30そこそこ？
信夫　うん
和子　若すぎるわよ、いくらなんでもそれは。
信夫　まあ、うん、そうだね。
和子　波之上（ナンミン）で働いてるんでしょ、

信夫　いや、ちょっと、まあ、
和子　だから、そういう人って事でしょ、
信夫　まあ、バー？　かな？　スナックかな？　で働いてるって事だけどね
和子　・・・
信夫　らしいって。でも、いい子だよ
和子　別に悪い人とか、お父さんを騙そうとしてるとか思ってないけどね・・・
信夫　うん
和子　だけど、困るよ、そんな、噂になったら
信夫　ならないよ
和子　なるよ、だって私、教頭先生にそれとなく聞かれたりしたんだから
信夫　え？
和子　なんか、聞いたみたい、どこかで
信夫　誰が言うんだろうね、そんなことわざわざ、
和子　いいでしょ、それはどうだって
信夫　放っておいて欲しいよ、いいじゃない、二人が幸せなら
和子　やっぱり！
信夫　わからないよ、分らないけど、仲いいんだよ。微笑ましくて
和子　そりゃプロなんだから、
信夫　またそんな風に…会えばわかるけど、そういうんじゃないんだよ、ほら、始めはお義父

さんのタクシーにたまたま乗ってさ
和子　それは聞いた
信夫　あ、そうか
和子　見ず知らずの人一緒に住むなんておかしいよ
信夫　見ず知らずの人でもないというか
和子　え？　前から知ってる人なの？
信夫　いや、違うみたい
和子　もー、いいよ、私がはっきり出ていくように言うから。
信夫　ええ？
和子　何、
信夫　いやー、いいんじゃないかねー、せめてキビが終わるまで
和子　ダメよ、そんな
信夫　困ってるみたいだし、
和子　人助けしてる余裕なんてないでしょ、お父さんに
信夫　手伝ってくれてるし
和子　十分でしょ、恵も、杉浦君、だっけ？
信夫　うん。
和子　その人も、信用できないといえばそうだけど、まあ、恵の知り合いだし、
信夫　知り合いっていうより、どうも、付き合ってたんじゃないかと思うんだよね

和子　え？
信夫　そんな感じがするんだよね
和子　今は
信夫　別れたんじゃないかと思うんだよね
和子　恵が言ってたの？
信夫　言ってない。
和子　じゃなんで
信夫　感じてしまうんだよね
和子　父親ってそういうの複雑だったりしないの？
信夫　ん？
和子　まあ、いいけど…。
信夫　あれ、恵に会った？
和子　ううん、まだ。
信夫　あなたたちの不思議な距離感、分りかねるわー
和子　何が
信夫　娘が帰ってきたんだから会いたいでしょー
和子　別に……
信夫　分かりかねるわー
和子　あのくらいの歳は親と距離ができるものなの、構わない方がいいんだって

信夫　そうなの？
和子　助けて欲しいときはそう言ってくるんだから、放っておくのが一番
信夫　そんなもんかねー
和子　べたべた干渉されると煩わしいし、折角世界が広がってるところなんだから、
信夫　関心持たれないと思って、悲しいんじゃないかねー
和子　子供の時はね、大人になれば違うよ、私がそうだったもん
信夫　和子はまた違うでしょー
和子　そんな事ないない

と、恵とユミが帰ってくる。クバ笠と弁当箱などもって

恵　ただいま
信夫　お疲れ様、
和子　お帰り
恵　うん、何どうしたの、
和子　ちょっと聞きたいことがあって、と、いうか…
恵　ふーん
ユミ　（和子に気が付いて）お客さん？
恵　違うの、母。

ユミ　へー！　和子さん
和子　はい。
ユミ　こんにちは、当山ユミです。
和子　…
ユミ　お母さん、見えないねー姉妹みたい。
恵　ええ？　やめてよ
ユミ　ホントホント。
信夫　おじいたちは？
恵　工場のトラック待ってる。
信夫　あー。
和子　工場のトラック
恵　今はね、引き取りに来てくれるの
和子　ああ、そうだよね。
ユミ　昔は皆で絞ったり、煮詰めたり、大変だったけど、あれがないと、淋しい感じがするね
恵　（和子に）ユミさんのウチもキビ畑やってたんだって
和子　そう。
ユミ　久々にやったからどうかと思ったけど、出来た。
恵　早いよー手際よくて
ユミ　そうかねー

信夫　杉浦君はどう？　頑張ってる
恵　うん、でもね杉浦君、ちょっと手際が悪くて、おじいの半分くらいしか倒せない
ユミ　コツがいる。
恵　それにしても、おじい、あれ一人でやるつもりだったって、絶対無理だよ
信夫　恵が帰ってきて良かったよ
恵　そうだね、私も帰ってきて良かった。なんか無心でキビ削ってると、モヤモヤがすっ飛んでく感じがする。
和子　あー、分る
恵　そう？
和子　うん、子供の時さ、家族、親戚みんなで、もっと一面のキビ倒してる時、途中で畑に転がって囓るキビの美味しさね、忘れられない。ほんとにねー大変なんだけど、頭が空っぽになって、それが気持ちいいんだよねー
恵　……うん、へー、
和子　何
恵　キビやってるとこ見たことないから、嫌いなんだと思ってた。
和子　そんなことない、戦争前は良く手伝ってた
恵　ふーん
信夫　疲れたでしょう、汗流して来たら
恵　ユミさん先どうぞ

ユミ　すみません
恵　いえいえ。
ユミ　じゃ、お先に
恵　はーい

と奥へユミが去る。

信夫　（和子に）ね、いい子でしょ
和子　うん、まあ
恵　何？
信夫　いやいや、お腹すいたでしょ、ご飯、俺やろうと思ってたんだ
恵　え？　いいよ、私やるから
信夫　いいからいいから、
恵　カンダバーの味噌汁しようと思って
信夫　いいね
恵　杉浦君が山之口獏好きなの
信夫　おー、
恵　「山之口獏がサツマイモの葉の味噌汁のこと書いてるけど、あれって美味しいのかな」って前からいってたの、私は忘れてたんだけど。

信夫　まあ、こっちじゃ普通に食べてるからね、
恵　うん、でね、食べてみたいなーっていうから、作ろうかって。
信夫　へー
和子　書いてた、山之口獏。
信夫　そう
和子　うん、東京で試したら全然美味しくなくて、なんでだろうって
恵　うん、
和子　私も東京で試したら、全然美味しくなかった
信夫　なんでかねー
和子　芋の種類かな、
信夫　そうかねー、そっかあ、杉浦君、沖縄の詩人知っててくれるなんて嬉しいねー、
恵　まあ
信夫　食べさせてあげなくちゃ、俺得意、作ろうね！
恵　あ、これ、採ってきてある
信夫　おーありがと、よし、任せなさい！
恵　でも
信夫　いいから、久々でしょ、お母さんと全然話してないじゃない、たまには
恵　だっておかずは
信夫　あるもので適当に、自信はありますよ

恵　知ってるけど

信夫　よしよし、杉浦君、びっくりするよー

と信夫張り切って奥へ。

恵と和子二人残って。

ジェット機の音。

和子　今年のキビ、不作なんでしょ、

恵　みたい、なんか細いし

和子　あれだね、補助金とか、色々入って、一時期は本当にお金になって良かったけど、もう、悪くなる一方かもね

恵　・・・

和子　これで来年復帰すれば、ますます厳しくなるんだろうな、おじい、そんなこと言ってたりする？

恵　しない。

和子　そう。

間。

恵　聞きたいことってそれ？
和子　うん・・・、違う、
恵　何？　杉浦君の事？
和子　あ、ねえ、お付き合いしてるの？
恵　してたけど別れた
和子　おおー、
恵　おおー、って何？
和子　いやいや、・・・いい人なんでしょ？
恵　うん、いい人。
和子　恵の事追っかけてきたの？
恵　違うって言ってたけどね、前から沖縄行ってみたいって言ってたから、たまたまなんじゃない？
和子　でも、だとしたら凄いね。
恵　まあね
和子　へー
恵　・・・それだけ？
和子　うーん、ユミさんって
恵　だと思った
和子　何、悪い？

恵　悪いっていうわけじゃないんだけど、いいじゃない別に、
和子　やっぱり、お父さんと、あの人
恵　違うよ、違うけど、そうだとしてもいいじゃないって言ってるの。何が悪いの
和子　悪いに決まってるじゃない
恵　ユミさんだって一人だし
和子　そう・・・
恵　おじいだってずっと一人なんだからそういう人がいたっていいじゃない
和子　でも、誰でもいいわけじゃないよ
恵　いい人だよ、ユミさん
和子　だってあの人・・・
恵　水商売してるって事？
和子　・・・うん
恵　何が問題なの
和子　だって困る、そんな
恵　誰も困らない
和子　人の噂になるし
恵　いいじゃない
和子　そんな訳にいかないよ、私だって教師してるし、
恵　・・・

和子　なんか変な事に巻き込まれたりしたら、
恵　ないでしょ、
和子　だってなんか逃げてるんでしょ？
恵　ああ、元旦那さんからね
和子　結婚してたの？
恵　うん
和子　詳しいんだね
恵　そういうこと聞きたいんでしょ、
和子　うん……子供は
恵　三人いたけど、一人は小さいころ死んじゃったって
和子　そう…
恵　で、あと二人はもう働いてるみたい、一人は結婚して
和子　そんなに大きい子がいるの？
恵　うん、最初の子供は１６で生んだって言ってた。
和子　……
恵　水商売、かもしれないけどちゃんと子供育てたの、私偉いと思う。そうやって頑張って働いてきた人なんだよ
和子　うん、
恵　おじいも立派な人だって言ってたし

和子　そうかもしれないけど

と、ユミが着替えて戻ってくる。

ユミ　さっぱりした、有難う。

恵　　よし、私もあびて来ちゃおう。

ユミ　うん。

と、恵、奥へ去る。

和子　お茶、飲みます？

ユミ　はい。有難うー

と、和子お茶を入れる。

ユミ　和子さん、学校の先生してるんだよね？

和子　ええ。

ユミ　凄いなー

和子　いえ、

ユミ　私ね、戦争前までは行けたんだけど、そのあとは学校いけなかったの
和子　終戦の時っていくつだったんですか
ユミ　八つ。
和子　そう
ユミ　島のね、国民学校
和子　ええ。
ユミ　女の先生、比嘉先生、比嘉悦子先生。
和子　覚えてるんだ
ユミ　覚えているさー、とっても優しかったんだー。男の先生は皆怖くってさー、
和子　ええ
ユミ　字が書けるの比嘉先生のお陰なんだ。漢字も少し。
和子　そう。
ユミ　うん。凄い、先生なんて・・・師範学校いったんだもんね
和子　うん、
ユミ　わー、凄すぎて、考えられない―、憧れるー
和子　別にそんな
ユミ　優秀だったんだね。誠治さんもいってたよ、すっごく頭のいい子だったって
和子　そんなんじゃないけど、勉強は好きだったかな。
ユミ　へー、勉強が好きとか、凄い。

和子　小説とか、詩とかね、読むのが好きだったの
ユミ　えー、読んだことない。
和子　一度も？
ユミ　教科書とかのは読んだかな、それくらい。
和子　ああ、
ユミ　子供がさ、
和子　ええ、
ユミ　子供が小さいとき、読んでって言われて、読めないわけじゃないんだけど、下手くそだし恥ずかしいでしょ、間違えたりとかしたら
和子　そうね
ユミ　和子さんは読んであげたりとかしたの？
和子　忙しくてそんなには、でも時々。
ユミ　いいなあ、だから恵ちゃんも優秀なんだね
和子　そんな
ユミ　うちの子たちはね、そんなに優秀とかじゃないけど、いい子だよ、凄く。
和子　ご結婚してるとか
ユミ　そう、娘はね、
和子　ええ
ユミ　もう一人、息子はね、鹿児島で働いてる。

和子　連絡したりは？
ユミ　あんまり、
和子　そう・・・・
ユミ　うん、私も何もしてあげられないし、子供たちも自分のことで精いっぱいだから。でもさ、怖いんだよね
和子　何が
ユミ　孫とか生まれたら、おばあちゃんになっちゃうんだよ！
和子　わ、ホントだ！
ユミ　ねー！　恐ろしいよー、
和子　・・・ユミさん、
ユミ　はい
和子　あなたがとってもいい人だって、恵が
ユミ　えー、恥ずかしい
和子　私もそう思った
ユミ　和子さん
和子　思ったんだけど、やっぱり・・・・

間。

ユミ　迷惑？
和子　ごめんなさい
ユミ　いいの、いいの、そうだよね、甘えて図々しく、
和子　何か、力になれることない？　働くところとか
ユミ　大丈夫、ホントはね、分ってたの、迷惑だって事
和子　そんなことない
ユミ　お店にも、連絡しないといけないし。
和子　・・・・
ユミ　ずっとそうやって働いてきたから、「モトシンカカランヌー（ムトゥ）」よ、分るでしょ？
和子　・・・・
ユミ　平気よ、慣れてる
和子　前の旦那さんって、大丈夫なの？
ユミ　そうそう、２番目の
和子　うん
ユミ　いい人なんだけどね、ほら、基地でさ、一斉に首になったでしょ、何千人って
和子　ああ、
ユミ　暴力振るう人じゃなかったんだけど・・・・きっとヤになっちゃったんだね、いろいろ、働くのも何もかも、
和子　うん

ユミ　だけどさ、そんなのみんな一緒でしょ？　働くしかないじゃない、何をどうやったって、
体売ったって、生きてかなくちゃならないんだから
和子　うん・・・・
ユミ　甘えてるのよねー、大の大人が、ぶら下がってこようとするの
和子　・・・・
ユミ　もうー、私もそうじゃない、人のこと言えないね
和子　ユミさん
ユミ　優しくされて・・・・、誠治さんも、皆とってもやさしいから甘えちゃった
和子　私、
ユミ　誠治さんて凄いよね、だって、全然知らない人にこんなに親切にしないでしょ、
和子　・・・うん
ユミ　もう、迷惑かけないから、心配しないで。
和子　ごめんなさい。
ユミ　やだ、謝らないで、和子さんが普通だよ、
和子　・・・・
ユミ　（と、三線に気が付いて）あ、三線、
和子　うん
ユミ　信夫さんが持ってきたの？
和子　そう、杉浦君に聞かせるって

ユミ　わー、やった、あたしもお願いしてたんだー
和子　そう

と、誠治と杉浦が帰ってくる。よごれた作業服、長靴、クバ笠、といった格好。
杉浦はヘトヘトのよう。

誠治　只今―
和子　お帰りなさい
誠治　和子、
杉浦　こんにちは、
和子　こんにちは、杉浦君？
杉浦　杉浦です。あ、恵さんの
和子　母です
杉浦　初めまして
和子　お世話になってます
杉浦　いえいえ、こちらこそ、その…
誠治　ようやく来たねー、
和子　遅くなりました
誠治　ホントだよー、娘が帰ってきてるのに、薄情な母親だよー

と恵が戻ってきて

恵　ねー、おじい、そうだよね
誠治　そうだよー
和子　恵が家に顔見せればいい話でしょ、
誠治　それもそうかー
恵　おじい、お風呂
誠治　おー、杉浦君、
杉浦　いえ、僕はあとからで
誠治　そうかね、じゃ、（と、縁側から上がって）
杉浦　はい
誠治　先、飲んでで、
杉浦　はい（と縁側に座る）
誠治　ユミ、お茶なんか飲んでるの
ユミ　美味しいよー
誠治　そうだろうけど、恵、ほら
恵　泡盛？　ビール？
誠治　泡盛に決まってるー

恵　はいはいー
ユミ　恵ちゃん、待って私いく。
恵　あ、うん。有難う

とユミ、誠治奥へ去る
と、ジェット機の音がする。
杉浦、空を見上げる。恵と和子も何となく見上げて。

和子　杉浦君、休学中なんだって？
杉浦　はい、そうなんです。
和子　親御さんは何て言ってるの？
杉浦　まあ、いいんじゃないかって。
和子　そうなの
杉浦　親父、議員やってるんですよ
和子　え？　議員？
杉浦　ええ、都議会の
和子　へえ、え、じゃあ、やっぱり継いだりとか、そういう
杉浦　まあ、そうですね、親父は僕を国会議員にしたいらしくて、まあ、迷惑な話なんですけど。

和子　お父さんからしたら・・・でも、迷惑か
杉浦　はい、で、受験失敗して
和子　浪人とか？
杉浦　してでも東大入れって言われたんですけどね、嫌で、浪人しませんでした。反発ばっかりしてるんです。
和子　わー。
杉浦　学生運動が激しくなったんで、親父が心配して、
和子　ああ。そうよね
杉浦　そんなわけで休学も、特に反対されずに、今のうちに色々見て回るのもいいだろうって沖縄に。
和子　あんまりそれもいい顔しなかったですけど、嫌がらせです。
杉浦　もー、心配かけちゃだめよ、
和子　嫌がらせは、ついでで、本当に来たかったんです、沖縄。
杉浦　そう、恵がきっかけだったりするの？
和子　え？　やめてよ、お母さん
恵　え？
杉浦　そうです、恵さんがきっかけです。
和子　そうなの
恵　そうだよ、それは。

恵　もともと興味あるっていってたじゃない
杉浦　それは、なんというか・・・

と、泡盛と湯飲みなどを持ってユミが戻ってきていて

ユミ　口実よね、（といいつつ皆に注いで回る）
杉浦　あ、いや、まあ、そうです。
恵　ええー
杉浦　日本じゃ・・・、あ、すみません
和子　いいから、それで？
杉浦　本土じゃ、沖縄って事かくす人が多いんですけど
ユミ　そうなの？
恵　そうだよ、「琉球お断り」って住むところも、バイトも探すの大変なんだから。
ユミ　ええー？
恵　日本語うまいですね、とか普通だよ？
ユミ　なによー、それー！
杉浦　恥ずかしながら、僕もそんな感覚が。友達も沖縄はアメリカなんだから、英語しか話せないんじゃないか、とか、そんな感じです。
ユミ　英語なんかちょっとしか話せないよー

杉浦　話せるんですか？
ユミ　リトルよー
杉浦　おお、
ユミ　オフコース（とみんなに泡盛がいきわたったところで）じゃ、親子の久々の再会を祝してカンパーイ！

みな戸惑いながらも「かんぱい」と続ける。

杉浦　（飲んで）ああ、染みる・・・・
ユミ　労働の後はしみわたるよね、で？
杉浦　え？
ユミ　出会いの話でしょ、二人の。
杉浦　え？　そうでした？
ユミ　そうよー、ね、和子さん
和子　うん、そうそう。
ユミ　ヤマトじゃ、内緒なんでしょ沖縄だって
杉浦　そうなんです。僕もあんまり知らなかったんですけどね、あとから思えば、ああ、そういえばって
ユミ　うんうん

杉浦　だけど、恵さんはそんなことなくて
和子　へー
杉浦　集会でも、堂々と沖縄のこと話してたんです、それで
ユミ　集会？
杉浦　はい、「沖縄奪還」って、盛り上がってたときがあったんです。
恵　　あっという間に、盛下がったけどね
ユミ　ええ？　早くない？
恵　　そうなの、本当に
杉浦　返還が決まりましたからね・・・その直前はかなり盛り上がって、その時に、壇上で、恵さんが
ユミ　おー、
和子　何話したの
恵　　覚えてない、急に、石嶺は沖縄なんだから、皆に訴えることがあるだろって
杉浦　え、急だったの
恵　　そうだよ
杉浦　知らなかった・・・
恵　　だから、よく覚えてない
杉浦　凄かったんです、皆、シーンとして聞いてた。
恵　　そうだったっけ、

杉浦　うん。
恵　へー
杉浦　沖縄がどんなに日本への復帰を願っているか、平和憲法のもとで暮らすことを待ち望んでいるかって…僕、本当に感動して、
恵　いいよ、やめて、その話
和子　…
杉浦　お母さんの話も
和子　私？
杉浦　はい、一緒にデモに参加したり、
恵　ホントに、ホントに、やめて
杉浦　あ、うん、ごめん
ユミ　その時は、もう知り合ってたの
杉浦　ええ、バイト先が一緒で
ユミ　喫茶店。
杉浦　はい
ユミ　意外な一面見て惚れてしまったんだねー
杉浦　いやあ…
恵　はい、もうこの話おしまいー、

と、信夫がやってきて

信夫　誰が誰に惚れたってー（とおつまみを出しながら）ハイ、とりあえず。
杉浦　おー、有難うございますー
恵　　お父さんも、やめてよー
ユミ　杉浦君が、恵ちゃんに惚れたって話だよー
信夫　やっぱりそうでしょー、分ってましたよー
恵　　何、分ってましたってー
信夫　（と、いつの間にか自分に泡盛を注いでおり）今日もお疲れ様――！
ユミ・杉浦　お疲れ様でしたー

皆飲んで。

信夫　美味しいねー
恵　　うん
信夫　あれ、恵飲んでる、
和子　あ、ホントだ、
恵　　うん、飲むよ
ユミ　強いよー恵ちゃん

信夫　一緒に飲むなんて初めてじゃないかねー
恵　そう？
信夫　そうかー、なんか感動だなー
恵　お母さんなんて、全然気が付かない
和子　うん、気が付かなかった。
信夫　信じられないよー、そういうとこ
和子　いいじゃないの、別に
ユミ　そうだよー、
信夫　それで、どんな一面に惚れたって？
恵　いいから、それはもう
信夫　何がいいのー良くないよ、お父さんだって知りたいよ。
恵　分かった、じゃ、今度。
信夫　えー、
恵　三線、お父さんが持ってきたんでしょ
信夫　あ、そうそう、（と、とりに）
杉浦　あ、ホントだ
信夫　聞きたいって言ってたさー
杉浦　はい、わー、嬉しいなあ。
信夫　さてー、何弾こうかね、（とつま弾く）ラブソングがいいかねー

ユミ　いいねー
信夫　ユミ、踊れるって言ってなかった、
恵　　あ、そうそう
ユミ　ええ？
信夫　カナヨーはどう？
ユミ　踊れるよ？
信夫　いいねーよし、ほら、ちょうど、いいよ、その手拭いが。
ユミ　ホントだ、（と、立って奥へ）
杉浦　（恵に）カナヨー？
恵　　・・・
信夫　（弾きながら）大好きな人の面影が浮かんで居ても立っても居られない、遊んでも踊っても忘れられないって歌だよ
杉浦　へー

と、誠治が来て

誠治　カナヨーかねー？
恵　　そうそう、
誠治　おおー、いいねー

和子　はい、（と誠二に泡盛を注ぐ）
誠治　有難うー

と、奥からユミが出てくる
信夫が歌い出して、
ユミが歌に合わせて踊る。

信夫　（カナヨー）面影の立てぃば
（ヨーカナヨー）宿に居らりらん（ハルヨンゾーヨカナーヨシーシ）
（恋人よ面影が立つので家におられない）
でぃちゃようし連りてぃ遊でぃ忘ら（さあ　連れ立って　遊んで忘れようよ）
貫木屋のあさぎ　手巾布立てぃてぃ（貫木屋の離れ屋で手ぬぐい布を織って）
我が思る里に情け呉らな（私が慕う貴方に　情け（愛のしるし）をあげたいな）
情呉るびけぃ　手巾呉てぃ何すが
（情け（愛のしるし）をあげるだけ？　手ぬぐいあげてどうするか？）
がまくくん締みるミンサ呉らな
（腰のくびれを強く締めるミンサー織（の帯を）あげたい）
遊でぃ忘ららん　踊てぃ忘ららん（遊んでも忘れられない　踊っても忘れられない）

思い勝（うみまさ）てぃいちゅさ　ありが情（なさき）（思いが強くなっていくよ　あの人の情）

と、踊りが終わる。

皆が拍手。

杉浦　（拍手しながら）凄い！　感動しましたー、もっと見たい！

恵　ほんとー！

ユミ　（座りながら）いいよー、もう

杉浦　そっか、疲れてますもんね

誠治　（杉浦に泡盛を注ぎながら）ユミが、こんなに踊れるの知らなかったよ

ユミ　楽しかったー、信夫さん、ありがとー

信夫　ユミ凄いよかったー、

ユミ　久々で緊張したけどね、一人だったし

信夫　（杉浦に）二人で、男と女で踊るんだよ

杉浦　へー

信夫　ラブソングだからね（と飲む）

杉浦　ああ、なるほど

ユミ　でもいない相手を思いながら一人で踊るのもいいよー

信夫　ああ、なるほど、そういう歌だもんなー

ユミ　悲しくて、それはそれで。
杉浦　踊り、どこで習ったんですか？
ユミ　戦争が終わったあと、何年か収容所にいたんだよねー
杉浦　収容所…
ユミ　そうそう、皆いったんアメリカに集められたんだよ、食べるものもなかったしね、
杉浦　はい、
ユミ　そこでね、教わったの、劇団みたいなのが出来てさ、そこで踊ったりもしたんだよ
誠治　そーかー…劇場もたくさん出来たもんな、そのあと
ユミ　うん、
杉浦　誠治さんは？　踊りは
誠治　僕は全然ダメ、歌も踊りも。
杉浦　沖縄の人で、歌も踊りもダメな人いるんですね
誠治　いるよー、杉浦君、それは偏見というものだよー
杉浦　お酒ダメな人もいるんですかね
誠治　それはいないよー
恵　　いるよー、飲めない人だって。
信夫　（つま弾きながら）それはいないと思うよー
恵　　お父さんも、極端だから、
杉浦　（信夫を見ていて）いいですね、三線…やってみたいなー

恵　（信夫に）ギターと近いといえば近い？
信夫　まあね、ギター弾けるの？
杉浦　ちょっとだけ
皆　おー
杉浦　いや、ヘタクソでバンド、クビになりましたけど
信夫　教えようか
杉浦　いいんですか？
信夫　うん、簡単だよ、すぐできる、これが…

と、ジェット機の轟音
と、杉浦突然立って

杉浦　うるせー！！

皆驚く。

恵　え、ちょっとどうしたの、
杉浦　だって、だって、折角みんなで楽しくしてるのに・・・腹が立って、
恵　まあ、そうだけど、

杉浦　本土の人間は誰も分ってないんですよ、僕もそうだ、全然わかってない
恵　急に、酔っぱらって、
杉浦　あのＢ５２は、ベトナムの人たちを殺しに行ってる、何のために？
信夫　ベトナムの人たちの為、なのかな
杉浦　本当に？　本当にベトナムの人たちの為なんですか？
信夫　それはわからないよ
杉浦　そうです、分らない、すみません、僕にもわからない・・・・。どうして沖縄だけが、こんななんでやってるのか何のためにやってるのか分からない戦争の為に、我慢しなくちゃならないのか…日本の安全保障の為って何なんですか、関係あるんですか、ベトナムの人たちが、殺されて、若いアメリカの人たちが、別に憎んでもいない人たちの上に爆弾落としに行って、自分たちも殺されて・・・・、

間。

信夫　俺はね、杉浦君、大工です。
杉浦　はい。
信夫　基地を作ってきました。なんでかってね、食うためです。生きるためです。
杉浦　信夫さん
信夫　銃剣とブルドーザーってね、知ってますか

杉浦　はい、いえ、なんとなくしか

信夫　無理やり畑も家もつぶして、基地にしたんですよ。アメリカがね、銃持って、座り込みしてる島の人たちを、どかす。ブルドーザーで、キビ畑も、田んぼもつぶしたし、土砂も運びました。同じ、沖縄の人間がね。辛かった。小さいおじい、おばあがね、折角生き残って、頑張って耕した畑を・・・・とってもいい畑だった、どこも・・・。

間。

信夫　でも、俺はね、平気な人間より、辛い人間がやった方がいいと思った。アメリカの犬って石をぶつけられたこともあったけど、俺は申し訳ない気持ちでやった。今もそうだけど、建設は本土の人間も入ってくる。俺たちの倍の人件費貰ってね。平気な奴らがいるんです。アメリカと一緒になって、平気でやるやつが・・・・どうせ誰かがやるなら、そんな奴らにもうけさせるのが許せなかった。

恵　お父さん、

信夫　恵にこんな話したことなかったね。

恵　うん・・・・

信夫　まだ、恵が小さいころだよ。

恵　うん

信夫　実際に泥にまみれて手を汚す人間は、本当の事なんて、知らない。仕方なく。ただ、食

うために。我慢したくてしてるんじゃないんだ。家のすぐ隣に基地がある、そこから爆弾を積んだ飛行機がひっきりなしに飛んでいく、そんな事、望んでる人間なんているわけない、

杉浦　はい。

信夫　ベトナムの人がね、沖縄のことを悪魔の島って言ってるそうですよ、

杉浦　はい、

信夫　なんでかなー、日本が戦争にまけたからかー、コテンパンに。惜しいところまで行ったと思ったんですよ

杉浦　…ええ

信夫　勝てると思ってたんですよねー、信じられないでしょ？　思ってたんですよ、負けるわけないって。神風が吹くってね。どでかい台風が来てアメリカの船全部沈めてくれるって。でもね、神風吹かなかったよ、負けたなー、これ以上ないってくらい完璧に。だからいいようにされる。やりたい放題に。植民地にされちゃったんだろうねー沖縄も日本も。

杉浦　…

誠治　僕が小さい頃はね、

杉浦　はい

誠治　中国もロシアも負かした日本という国が、誇らしかったんですよ。

杉浦　はい

誠治　うん、そう思ってた。本当に。だからね、立派な日本の国民の一員として認められたかった、おかしいですかね、

杉浦　いいえ、

誠治　そうやって頑張ってきたんですけどね、いつも裏切られる。それもこっぴどく。でもね、また信じようとしてる、

和子　そうじゃないよ、

誠治　和子たちは日本という国を信じてるから、返還運動して、信じてるから、不公平な返還ならいらないって怒ってるんでしょう？

和子　……

誠治　いいんだよ、それで。（杉浦に）皆、我慢してるように見えるでしょう、だけど、それぞれのやり方で、闘ってる。僕は先祖から引き継いだこの土地で、キビを作り続ける。すぐそこに、基地があって、かすめるようにＢ５２が飛んでいてもさ。これが僕のやり方。和子は先生しながら、どうしたら、基地がなくなるか、嫌なものは嫌だって言わなきゃならないってデモしてる。

和子　お父さん

杉浦　僕に出来ることはあるんでしょうか、

誠治　キビを倒してくれてるじゃない、それだって、僕にしたら、沖縄の為になってるよ。

杉浦　はい

信夫　俺はヤマトから金をぶんどってやるんだー（と三線で「ヒヤミカチ節」を弾き始める）

恵　お父さん、

信夫　（歌って）「名に立ちゅる沖縄宝島でむぬ　心うち合わち　うたちみしょーり
（名の知られた沖縄　宝島だから　心をひとつに合わせてお立ちください）
ヒヤ、ヒヤ、ヒヤ、ヒヤ　ヒヤ　ヒヤミカチ起きり　ヒヤミカチ起きり
がくやないしゅーらーさ花や咲き美らさ　我した此ぬ沖縄世界に知らさ
（音楽は鳴りかわいらしい　花は咲き　美しい　私たちのこの沖縄世界に知らせよう）
七転び転でぃひやみかち起きり　我したこの沖縄世界に知らさ
（七転び転んで「エイ」と言って起きよ　私たちのこの沖縄世界に知らせよう）

続いて「唐船どーい」の演奏になり、皆が踊り始める

信夫　「唐船ドーイさんてーまん　いっさん走えーならんしや（ゆいやねー）
（唐船だぞー、　と言ったところで、一目散に走れないのは、）
若狭町村ぬ（さー）瀬名波ぬタンメー　（ハイヤセンスルユイヤネ）
（若狭村の瀬名波のおじいさん）
音に豊まりる大村御殿ぬシンダン木
（音にも名高い大村御殿の栴檀の木）
那覇に豊まりる久茂地ぬほーいカジュマル木

（那覇で名高い枝が這うように伸びたガジュマル木）
今日の誇らしゃや何にぎやな誓（きゆふくなうたてぃ）る
（今日の嬉しさは何にたとえられる）
蕾（つぃぶう）で居る花の露行逢（つぃゆちゃ）たごと
（蕾のままだった花に露がついて花開いたようだ）

暗転

第3場

同じ日の深夜。月が明るい。
縁側で杉浦が三線をたどたどしくつま弾いて「生活の柄」を唄っている。
傍らに山之口獏の詩集。

杉浦　「歩き疲れては　夜空と陸との　隙間にもぐり込んで　草に埋もれては寝たのです　所かまわず寝たのです　歩き　疲れては　草に埋もれて寝たのです　歩き疲れ　寝たのですが　眠れないのです　近ごろは眠れない　陸をひいては眠れない　夜空の下では眠れない　ゆり起こされては眠れない　歩き　疲れては　草に埋もれて　寝たのです　歩き疲れ　寝たのですが　眠れないのです　そんな僕の生活の柄が　夏向きなのでしょうか寝たかと思うと寝たかと思うと……」

と、恵が来ている

杉浦　（恵に気が付いて）ごめん、うるさかった

恵　ううん、眠れなかっただけ。もう弾けてる……

杉浦　弾けてないけど、面白い

恵　そう

杉浦　（つま弾いて）うん。

恵　「生活の柄」だね。

杉浦　うん、

恵　いい曲

杉浦　うん。

恵　杉浦君が作ったの？

杉浦　まさか、高田渡って知ってる？
恵　「自衛隊に入ろう」の人？
杉浦　そう

二人、交互に「自衛隊に入ろう」を歌う。
間

杉浦　こんなに皮肉ってるのに、自衛隊の勧誘の曲だって思った人がいるんだって
恵　いるでしょ、そういう人も
杉浦　僕も始めそう思った
恵　うそ、
杉浦　嘘。
恵　・・・（無言で杉浦を叩く）
杉浦　高田渡が山之口獏が好きで、いろんな詩に曲つけたんだ。「生活の柄」にも
恵　へー。
杉浦　最近アルバム出したんだよ、
恵　知らなかった、今度聞いてみる
杉浦　うん（とタバコに火をつけると吸う）

二人、たばこの煙を見ている

杉浦　いいご家族だね
恵　うんー・・・そう？
杉浦　僕の家とは大違いだ。
恵　そうなの
杉浦　うん、空々しいんだ、ぞっとするくらい。
恵　でも杉浦君は、いい子に育ってます。
杉浦　そうだろうか
恵　うん
杉浦　じゃなんで、
恵　何
杉浦　いや、ごめん

と、恵が杉浦のタバコを取って吸う、とすぐに消してしまう。

恵　私が集会で沖縄の事話した時
杉浦　ああ、
恵　話しながら、自分はこんなに沖縄の事考えてたんだってびっくりしたの。

杉浦　……

恵　私、沖縄が嫌いだと思ってた。

杉浦　そんな風に思ったことない

恵　ホントはね、そうなの。多分。

杉浦　そっか

恵　（笑って）「お国は？」って聞かれたら「ずっとむこう」とか言っちゃいそうなくらい。

杉浦　山之口獏の「会話」だ。「ずっとむこうとは」

恵　「南方」

杉浦　「南方とは？」

恵　「亜熱帯」

杉浦・恵　「アネッタイ！」

二人笑う。

恵　「赤道直下のあの近所」

間。

杉浦　でもあの詩は、沖縄大好きって、詩だと思うけど

恵　そんなに単純じゃない、だって沖縄って一言も言わない。
杉浦　ええ？　そうだっけ…（詩集を開くと見つけて読む。）「亞熱帯なんだが　僕の女よ　眼の前に見える亞熱帯が見えないのか！　この僕のやうに　日本語の通じる日本人が　即ち亞熱帯に生れた僕らなんだと僕はおもふんだが　酋長だの土人だの唐手だの泡盛だのの同義語でも眺めるかのやうに世間の偏見達が眺めるあの僕の國か！」……言ってない。
恵　（笑う）だから、複雑なの
杉浦　……うん
恵　東京に行って、沖縄のいいとこも悪いとこも、とってもわかった気がして。
杉浦　そういうものかもね、
恵　お父さんが、基地つくってるのも、知ってたの。だけど私は、お父さんがそうやって働いたお金で育ててもらって、大学も行かせてもらってる。お母さんは基地反対って言ってるけど、家でお父さんに基地の仕事しないでって言わない。
杉浦　うん
恵　変だよね、
杉浦　うん
恵　お母さんのしてることって綺麗ごとじゃない？　矛盾してる。弱い沖縄を見捨てるなっていうけど、困ってるユミさんには冷たいの。ほんと、すごく嫌だった、でも
杉浦　違った？
恵　私が沖縄の事、ああやって話せたのお母さんのお陰だもん。結局。

杉浦　・・・

恵　「君、沖縄だろ、沖縄のこと話せ」って、言われて、なんだが凄く腹立って私が代表なんだって思って、何も知らんヤマトンチュ、聞けー、と思いながら、しゃべったの。

杉浦　そんな怒ってるなんて思わなかった。

恵　お母さんが言ったの、話を聞いてほしいときは、怒っててもいいから、怒りをぶつけずに、本当に自分が思ってることを話しなさいって

杉浦　おー、

恵　子供の時だよ？　6歳とか、

杉浦　え？

恵　子供にそんなこと言う親ってどうなの

杉浦　怖い

恵　でしょー？

杉浦　生徒にもそうなのかな

恵　生徒とか、親御さんには、すごくいい先生って言われてる、

杉浦　へー

恵　私はさ、結局沖縄の人間だし、あの人の娘なんだよね・・・・。理屈っぽくて、変な正義感とか、

杉浦　ああ

恵　思い当ってる

杉浦　うん、政治家向きだよ。
恵　ええ？
杉浦　正義感だけ余計だけど。
恵　そう
杉浦　どう？　政治家。
恵　絶対無理
杉浦　俺より向いてるよ
恵　ならないの、政治家
杉浦　そうだなー、俺、向いてないんだよな、どう考えても。
恵　人の話聞いてくれて、共感してくれて
杉浦　うん、
恵　お父さんたちの、話、
杉浦　ああ、
恵　初めて聞いた。杉浦君のお陰。有難う。
杉浦　何にも知らないで、酔っぱらって申し訳ないことした
恵　ううん、聞けて良かった。私は…杉浦君みたいな人に政治家になって欲しい
杉浦　…じゃ、政治家の妻になってくれる？

間。

恵　政治家の妻はもっと無理。
杉浦　そうかー、じゃ、政治家にはならないでおこう

間。

杉浦　味噌汁！
恵　急になに、
杉浦　美味しかった
恵　そうでしょ！　でも、沖縄以外で食べると美味しくないの
杉浦　ああいう味噌汁が毎日飲めたら…
恵　あれ作ったのお父さんだよ
杉浦　…

間。

と、カバンを持ったユミが入ってきて

ユミ　あ、
杉浦・恵　あ

ユミ　ごめん、
杉浦　いえいえ、もう、寝るとこです。

と杉浦、三線を片付けて

杉浦　おやすみなさい。
ユミ　おやすみなさい。

何となく、恵は残って。
ユミは端にカバンを置くが、恵も杉浦も気が付かない。

ユミ　お邪魔してしまった、
恵　全然。

間。
ユミも何となく座って。
恵、何だか急に面白くなって吹き出す

ユミ　どうしたの？

恵　わかんないけど、面白くなっちゃって。（と、倒れて笑う）
ユミ　（その様子を見て）杉浦君？
恵　うん・・・そう、（と落ち着いてきて）あー面白かった。
ユミ　お似合いだね、
恵　・・・そんなんじゃないの
ユミ　違うの？
恵　うん。
ユミ　別れちゃったの？
恵　うん。
ユミ　えーどうして。
恵　とってもいいお家の子なんだよねー
ユミ　わかるー
恵　分かる？
ユミ　分かるー。
恵　だから。
ユミ　だから？
恵　うん、だから。

間。

恵　（手で顔を覆って）うまくいかないと思うの、結局。
ユミ　そっか。
恵　うん。

間。

恵　よし、私も寝よう。
ユミ　うん
恵　明日は、ユミさんと同じ位削りたい！
ユミ　……
恵　無理かな
ユミ　無理じゃない、もう、同じ位だよ、
恵　えー、なんかなー、早いんだよねー
ユミ　そーかなー
恵　技を盗もう。
ユミ　（笑って）技。
恵　おやすみなさい
ユミ　お休みー

恵が奥に去り、
ユミが一人になる。
置いてある山之口獏の詩集を開いてみる。
何となく寝転がる。
ふと横を見ると、座卓の下に、誠治がいるのに気が付く

ユミ　（非常に驚いて）ええ？！
誠治　うん。
ユミ　（起きて、覗いて）ええ？
誠治　うん。

間。
誠治も座卓の下から出てきて起き上がる。

誠治　いやー、参ったね。
ユミ　寝てたの？
誠治　途中まで
ユミ　途中？

誠治　いつのまにか寝てたんだね。
ユミ　そうかー、気が付かなかった。
誠治　酔っぱらってしまった。
ユミ　皆飲みすぎたんだね
誠治　和子たちは？
ユミ　泊まってる。
誠治　そうかね。
ユミ　うん。
誠治　いやー、なんか声するなーと思ってだんだん目が覚めてきたわけさ
ユミ　ああ、
誠治　その時は、もう、二人は良い感じになっていて、もう、出るに出られなくなってしまってさ
ユミ　（笑って）それはそうか
誠治　笑い事ではないんだよ
ユミ　ごめん。
誠治　ハー、困ってしまった。
ユミ　もう一回寝ればよかったんじゃない
誠治　そんな、寝られないよー、何かが始まってしまうかもしれないと思って、寝るどころじゃない

ユミ　そうかー
誠治　切ない終わりだった。
ユミ　なに、そのいい映画見た後みたいな感想。
誠治　あ、本当だ。
ユミ　（笑う）ずっといたなんて、二人が知ったら驚くね、
誠治　絶対言わないでよー
ユミ　言わない
誠治　ホントにー
ユミ　いわない、ホントに言わないから
誠治　お願いしますよー、どんな顔して二人に合えばいいか分からなくなっちゃう
ユミ　うん
誠治　杉浦君は、恵のことが好きなんだねー
ユミ　うん、
誠治　どうなるのかなーこの先二人は
ユミ　また、
誠治　なに
ユミ　映画見た後みたい
誠治　うん。いい映画だった
ユミ　映画じゃない、

誠治　分かってるけどね（と笑う）

間。

誠治　（ユミの持っている詩集をみて）それ。
ユミ　詩集？やま・・・
誠治　山之口獏って読むんだよ
ユミ　ばく？（笑って）変わってる
誠治　沖縄の詩人だよー
ユミ　へー昔の人？
誠治　僕より年下だよー
ユミ　へー！
誠治　死んじゃったけどね
ユミ　戦争で？
誠治　病気で。10年くらい前かな。
ユミ　・・・そっか
誠治　短いからお話と違って読みやすいよ。
ユミ　へー
誠治　（見合上げて）月がきれいだねー

ユミ　ホントだ

ユミ、誠治に寄りかかる

誠治　どうした、
ユミ　有難う、誠治さん
誠治　なにー
ユミ　ううん、
誠治　有難うはこっちだよー、キビ手伝ってくれてほんとによかった。
ユミ　役にったった？
誠治　立ってる立ってる。ユミが一番働いてる。ちゃんとお給料出すからね、
ユミ　いいよー、泊めてもらって、ご飯食べさせてもらってるんだもん
誠治　ダメダメ
ユミ　今年は不作だし
誠治　そうなんだけどね、だから、そんなには払えないんだよ、
ユミ　いらないの
誠治　そんなこと言わないで、ちゃんと何日働いてくれたかつけてあるんだから。
ユミ　うん。

間。

誠治　もしかして、キビが終わったら、放り出されると思ってる？

ユミ　・・・何にも考えてなかった。

誠治　この先どうするか一緒に考えようね。ユミは、もうウチの子なんだから。

ユミ　誠治さん

誠治　あんな、女の子にけがさせるようなやつ、許せないよ。刑務所にぶち込んでやりたいくらいさ、

ユミ　いいよー誠治さん、私女の子って年じゃないよ

誠治　僕からしたら女の子だ……ユミが嫌な風にはしないから、心配しなくていいんだよ。もしここに居たいならいつまでもいていいんだし。おじいじゃ頼りないか

ユミ　ううん。

誠治　よしよし。

間。

誠治　じゃ、おじいも寝よう。明日も頑張ってキビ倒すからね

ユミ　うん、おやすみなさい。

と、誠治去る。ユミ、一人残る。
本を広げて少し眺めているが、やがて本を置き、
カバンを持つと出で行こうとする。
思い返すと、本を持ち、下手前へ去っていく。

暗転。
音楽。

第４場

年が明けて１９７２年。復帰の年。３月。製糖工場の操業はこの日までとなっている。
キビの刈り取りは無事済んだようだ。
杉浦はあれからずっと波平家に泊まって、キビを倒している。
一度東京に戻った恵も、また帰ってきて手伝っている。
ユミは一度出ていったきりどこへ行ったのか分からなくなってしまった・・・・。
キビ畑から戻ってきた誠治、恵、杉浦が作業着姿で話しながら入ってくる。
疲れ果ててはいるが、やり終えた充実感に満ちている。
座卓の上には新聞。恵の手には郵便物が何通か。

杉浦　じゃあ、これから池原さんの家に？
誠治　そうそう、二人とも一緒に行こうよー、角煮があると言ってたよ
恵　　ああー、美味しいんだよねー、あそこの家の角煮。
誠治　御馳走が並ぶと言ってたよ、ウチは泡盛待っていけばいいだけさー
杉浦　え？　恵は行くの？
恵　　行くいく、だってご飯の支度しなくていいんだよ？　ありがたいよー。さすがに疲れたー（と郵便物を座卓に置く）
杉浦　僕もいいんですかね
誠治　何をいまさら、
杉浦　ですねー

と言いながら皆、縁側に腰掛けたり、居間に上がったり。

杉浦　（縁側に倒れこんで）絶対に無理だと思いましたけど、終わりましたねー見事に。
誠治　もう絶対に終わりませんと言って、泣き出したこともあったね
恵　　ええ？　いつ？
杉浦　恵が一度東京に戻った後、しばらく僕一人でやってた時があってさ、
誠治　先に風呂に入ってくる、皆で着替えたら、出かけようね

と、誠治奥へ去る。

恵　で、いつ泣いたの、

杉浦　ユイマールだか何だか知らないんだけど、誠治さんが、他の畑に手伝いに行っちゃってさ、

恵　わー酷い、

杉浦　でしょー、（と、そこにある一升瓶の泡盛を湯飲みに注いで飲む）あー、うまい。

恵　（笑って）もう、いつの間にか酒飲みになったねー

杉浦　泡盛飲まないとやってられない体になってしまった・・・

恵　それで？

杉浦　ああ、一人で倒して、一人で削って一人でまとめてさー

恵　それはつらいねー

杉浦　つらいよー、一日必死にやっても、全然進まなくてさ

恵　人が多いほど捗るからね

杉浦　そうなんだよ、それさー、当たり前だろって思ってたんだよ、何言ってんのって

恵　うん、

杉浦　（熱く）だけど違うんだよね、足し算じゃないんだ、掛け算なんだよ

恵　そうそう

杉浦　何倍も、何倍も捗るからね、一人、人が増えただけで

恵　そうなんだよねー
杉浦　一人でやり始めて三日目かな、雨の中一人で昼飯食べて…
恵　ああ、
杉浦　台風が多かったから、キビが曲がって曲がって、もう、からまる、からまる。
恵　あれで体力が奪われるのわかる。
杉浦　そうなんだよ、そんでなんか自分も絡まるし、ひっくり返ってさ、手も切っちゃうし
恵　えーどこ？
杉浦　ここ、（と見せる）
恵　わ、結構いったね。（と、杉浦の手を取る）
杉浦　…うん、中々ふさがらなくて。
恵　だろうねー
杉浦　で
恵　泣いたんだ。
杉浦　もう、絶対絶対終わらねーって、一人で叫んでさ
恵　なんか急に叫ぶよね、杉浦君。
杉浦　そうなんだよ、
恵　あれ良くないと思う、
杉浦　うん
恵　びっくりしちゃうから

杉浦　うん、気を付ける、でも、ホントに我慢できなかったんだよね
恵　まあ、分るけどさ
杉浦　そしたら、誠治さんがいて、
恵　おお、
杉浦　恥ずかしかったんだけど、どうにも止まんなくて
恵　うん、
杉浦　自分のところも終わらないのに、なんで人の手伝いするんですかって
恵　そしたら
杉浦　「そういうものだよ、手伝えば、手伝ってもらえる。」
恵　・・・
杉浦　でも、俺は一人でやってて全然進みません、見てください、やってもやっても進まない。

間。

恵　おじいはなんて？
杉浦　「焦ることない。キビを一本一本倒していくしかないんだからさー。そうすればちゃんと終わる。」そのあとその日は二人でやって。次の日からまた一人
恵　泣きながら（と笑って）でも終わったね、ちゃんと。
杉浦　うん。恵も帰ってきてくれたし、最後はどんどん手伝いの人も増えてきて。

恵　終わったところからね、手伝いに来てくれる。
杉浦　あの子たちも。助かったなー子供たち、
恵　そうでしょうー毎年手伝ってくれるんだよ
杉浦　時々遊んだり、はしゃいだりするけど
恵　子供だもん
杉浦　恵もああやって手伝ってたの？
恵　うん、いやいやね（と笑う）
杉浦　でもみんな俺よりうまかったよ、悔しいけど、
恵　しょうがない、小さいころから手伝わされてるんだもん。
杉浦　そうだよなー、
恵　（また杉浦の手を見て）肉刺ができて、つぶれて、またできて。傷だらけ。
杉浦　うん。
恵　かっこいいよ、何だか。

間。

杉浦　沖縄に来て、サトウキビ畑で働こうと思った。最後まで、やり遂げたかったんだ
恵　やり遂げた。凄い
杉浦　恵のおじいと、恵と働けるなんて思ってなかったけど、

恵　ねー、ビックリした

杉浦　ここで、会った時、決めてたんだ。最後まで逃げないでやり通せたら、もう一度お願いしようって、

恵　杉浦君。

杉浦　僕と結婚してください。

と、ジェット機の音。

恵が何か言う。

ジェット機が通り過ぎて。

杉浦　え？

恵　（もう一度言う）出来ません、ごめんなさい。

間。

杉浦　そっか

恵　ごめん

杉浦　うん、わかった・・・・。

恵　うん。

と、着替えた誠治が現れる。

誠治　さ、二人も入ってきたらいい

杉浦　え？　あ、はい。

誠治　あ、その前に、これね

と座って二人に封筒をそれぞれに渡す。表書きには、それぞれの名前が。

誠治　ご苦労様でした。（と渡す）

杉浦　有難うございます。（受け取る）

誠治　はい、恵もご苦労様（と渡す）

恵　有難う（受け取る）

誠治　そこにね、領収書入ってるから、確認してあとで書いて、ハンコ推して、

杉浦　はい。

誠治　二人とも、どうも有難う

誠治が頭を下げると

二人も下げる。

誠治　ドルで払うのもこれが最後になるのかな？
杉浦　ああ、そうか
誠治　来年また来てくれるかね。
杉浦　はい、来ます。
誠治　少しでも来てくれて、顔見せてくれればね、嬉しいよ。
杉浦　来ます、絶対。
誠治　うん。その時は円で払うからね、
杉浦　ああ、記念に取っておこうかな
誠治　つかいなさい、そんな。
杉浦　何か、特別なお金です。僕にとっては
誠治　そうかね、好きにすればいいけど・・・・この円高で、どうなるか分からないよー。いったいどこまでドルが下がるのか、
杉浦　はい。
誠治　これからどうする？　いていいけど僕は。考えたら、沖縄もっと見て回りたいんじゃない？
杉浦　ええ、見て回ったり、どこかで働いてみたり、5月の復帰まではいようと思ってます。
誠治　そうかー、行きたいところがあれば、連れて行ってあげるよ、おじいのタクシーに乗りなさい。

杉浦　はい
恵　そろそろ、タクシー辞めた方がいいんじゃない？
誠治　バカ言っちゃいけないよー、右側通行のうちはやめるつもりないからね
杉浦　ああ、そうか
誠治　左側通行になったらね、やめるかもしれないよー
杉浦　いつになるんですかね
誠治　まだ先になるみたいだよー。世替わりなんて、中々体験できないから、折角ならどうなるか見ていて欲しいよ
杉浦　はい、
恵　（封筒を見ていたが）ユミさんにも受け取ってもらいたいね。
誠治　うん……
恵　どこに行っちゃったんだろう
誠治　うん、ユミの働いていたお店にも行って聞いたんだけどね、知らないといわれたよ
恵　うん、
誠治　もし何かわかったら連絡くれることになってるしね、ユミもきっと落ち着いたら知らせてくれると思うんだ。
恵　そうだね
誠治　うん。

間。

誠治は何となく座卓の上に置いてある郵便物を見ているが、

誠治　（気が付いて）あ、

恵　どうしたの？

誠治　ユミからだ、（と手紙の封を切る）

恵　え？

恵と杉浦、誠治を見守る

誠治、眼鏡をかけると声を出さずに読みはじめる。

恵　おじい、読んで

誠治　ああ、「波平誠治様、皆さま。お元気ですか？」

恵　ハイ元気です。

誠治　「キビの刈り取りは、間に合ったでしょうか？」

杉浦　間に合いました。

誠治　（杉浦を見てほほ笑む）「きっと無事に終わったろうなと思っています。」…「急にいなくなってごめんなさい。」

間。

誠治　「誠治さんが私のことを心配して波之上のお店に何度も訪ねて来てくれたと聞きました。今私は、店長に紹介してもらったお店で、元気に働いています。詩集、勝手に借りてしまいました。」

杉浦　あ、そうだったんだ、どおりで見つからなかった。

恵　なかったの？

杉浦　うん

誠治　「仲良くなったお客さんに教えてもらったりして、少しづつ読んでいます。読み終わったら、必ず返しに行きます。」

杉浦と恵、なんとなく嬉しくなって笑いあう。

誠治　「それから、また、キビ畑に行って、誠治さんと杉浦君が倒したキビを削ります。きっともっと上手になった恵ちゃんと競争したいです。きっと次のキビはは豊作で太くて甘くなると思います。皆さんに会える日を楽しみにしています。　当山ユミ」

恵　わー良かったね、元気そう。

誠治　とにかく無事がわかってよかったよ。

杉浦　はい。

恵　おじい、住所は？
誠治　（封筒をみて）書いてない。
恵　そうかー。
誠治　波之上にいって聞いてみる、やっぱりあの店長、知っていたんだよ、知らないと言ってたのに。
恵　だけどおじいの事ユミさんに知らせてくれてさ、だからユミさんも手紙くれたんだし
誠治　それはそうだね。
杉浦　だけど分からないなー、どうして急に出ていったんだろう
誠治　考えたけど、分らないなー、最後に話したの僕だったんだけど、その時は、何も言ってなくてそういえば確かに詩集の話はしたんだよね・・・
杉浦　そうですか
誠治　あとは・・・、でももういいよ、きっと事情があったんだ
恵　・・・
誠治　恵、何か知ってるの？
恵　・・・え？
誠治　ユミが出ていった事情とか、
恵　ううん、
誠治　そう
恵　うん・・・シャワー、先につかう？

杉浦　あ、いい？
恵　　うん。（恵は和子が出て行って欲しがってたことを誠治に言おうか迷っている）
杉浦　じゃ、

と杉浦は立ち上がって奥へ去る。
誠治はまた声を出さずに手紙を読み始める。

恵　　ねえ、おじい…
誠治　（手紙から目を離さずに）うん？
恵　　もしかしたらさ・・・・

と、信夫と和子がやってくる。

信夫　お義父さんー
誠治　おお、
信夫　恵もお疲れ様
誠治　間にあったよー、どうにか
和子　良かったねー、お疲れ様でした
誠治　二人も忙しい合間を縫って手伝ってくれてありがとうねー

信夫　いやいや、全然できなくて……あれ？　杉浦君は？
恵　お風呂
信夫　そうかー、
和子　杉浦君も本当に頑張ったもんねー
信夫　これさ仕入れね、ビールと泡盛。（と縁側に置く）
和子　これあとジュージーね（と風呂敷に包んだ重箱を）
誠治　有難うー
信夫　手伝えなかったからさー、
誠治　これから池原さんちに行くんだ、お土産にしようねー
和子　そうなの
誠治　うん、一緒に行けばいいよ、しばらく会ってないんじゃないの？
信夫　ああ、そうなんだけどね
誠治　何
信夫　んー、軍用地料の話になると思うよ、
誠治　復帰で6倍になるという話かね。
信夫　それもあるし、
誠治　今日はそんな話にはならないだろう、酔っぱらうだけさ、
信夫　うん、
誠治　それより、ほら、みて、ユミから手紙が来たよ

信夫　おおー、どうしてるって？
誠治　元気にしていると言ってたよ、ほら（と手紙を）
信夫　それは良かったー。心配していたんだよ

と、和子と二人で手紙を読み始める。

誠治　2年しか学校行ってないのに、自分で勉強したんだよ、偉いねー、字もきれいだよ。考えたら、ユミの字なんて初めて見たー
和子　うん、（と読んでいる）

と電話が鳴る。

誠治　はいはいー（と電話にでる。）もしもし、ああ、うん、・・・これから来るよ、5人で、

信夫、誠治を見るが「いいから」と手振り

誠治　・・・そう、え？　ユミ、ああ、うん、それがさ、手紙が来たんだよ、元気にしてるって・・・新聞？・・・・読んでないけど、恵、ちょっと（と恵に新聞を取って欲しいと）・・・・え？・・・・うん、何面だって？

恵、新聞を取って誠治に渡す。

誠治　いやいや・・・（と新聞を見る）

間。

皆、誠治を見ている。

誠治　・・・・え？　うん、あったよ・・・・

食い入るように新聞を読んでいるが、

誠治　・・・・

誠治の読み終わった新聞を恵たち3人は読む。

誠治　・・・・え？　ああ、どうだろうね・・・・電話で問い合わせようかね、うん、・・・・うん・・・・いや、直接警察に行ってみるよ、ああ、信夫が来ているし、・・・・うん、何か分かれば連絡するよ。知らせてくれて有難う。

と誠治電話をきる。

和子　お父さん、

誠治　分からないけど、そういう事らしい。

恵　　・・・・

間。

誠治　迎えにいってあげなきゃ、だってユミはうちの子だから・・・・

信夫　ユミには子供たちがいるから、きっと警察から連絡がいっているはずだよ。

誠治　あ、そうだね

信夫　それでも・・・・行こうか、

誠治　うん。

間。

誰も動かない。

恵　　お母さんでしょ、

信夫　恵？
和子　……。
恵　お母さんが、ユミさんにここ出て行けって言ったんでしょ？
信夫　恵、
恵　そうでしょ？

間。

和子　……うん。
信夫　出ていけ、なんて言わないでしょ？　出て行って欲しい、みたいな事でしょ？
恵　お父さんも知ってたの？
信夫　いや、ちらっと、でも本当に言ったかどうか
和子　言った。言い方は関係ない。
恵　酷い、
和子　うん……

と、着替えた杉浦が奥から来て、立ち止まる。

恵　お母さんのせいだよ、お母さんのせいでユミさんは……

杉浦　…ユミさん、何かあったの？
恵　殺されたのよ、
杉浦　…
恵　新聞に書いてある。

杉浦、開いてある新聞を読む。

杉浦　…「犯人は当山さんを殺害した後その場で自殺したもよう、元夫で無職の…」…これ、本当にユミさん？
信夫　お父さん、行こう、僕が運転するから
誠治　恵、お母さんに謝りなさい
恵　…どうして？
誠治　もし、出て行って欲しいとお願いしたとしたって、和子のせいじゃないからだよ
恵　おじい…
誠治　そんな風に和子を傷つけたってユミは喜ばない、優しい子だったからね
恵　嫌、
誠治　恵
恵　だってお母さんのせいでしょ、お母さんが出て行けなんて言わなければ、ユミさんはここにいたもん、一緒にキビ削って、一緒に間に合って良かったねって…

間。

誠治　一緒に喜べればよかった。もしかしたら、一人で寂しくしてるかもしれない。だから会いに行ってくるよ。

恵　うん

誠治　和子も一緒に行こう

和子　大丈夫、ここで待ってる。

誠治　・・・そうか

和子　うん。

と、誠治と信夫は出ていく。

恵と杉浦、和子が残って。

暗転。

音楽

第５場

１９７２年５月１５日の朝。昨日から雨が降り続いている。
机の上に日の丸。
仏壇に手を合わせている誠治。
杉浦が入ってくると、

誠治　（杉浦に気が付いて）おはよう。
杉浦　おはようございます。あの、僕もいいですか
誠治　ああ、いいよ。

と、杉浦も線香をあげて、手を合わせる。
間。

誠治　（立ち上がって外を見ると、）止みそうもないね、雨。
杉浦　はい
誠治　やらずの雨だ。
杉浦　はい
誠治　デモ、行くのかね？
杉浦　はい、
誠治　そう。恵は帰ってこなかったな
杉浦　はい、東京の式典に行くって言ってました。
誠治　そうだったの、知らなかった。
杉浦　中に入れるわけじゃないみたいですけどね
誠治　そうか・・・
杉浦　誠治さんは、
誠治　ラジオで聞くよ。生中継があるからね
杉浦　皆で？
誠治　いや、ここで一人で聞くよ。偉い人たちが何を言うか、
杉浦　はい。
誠治　新しい何かなんて言わないんだろうねー、みんなが知ってることを丁寧にいうんだろうね、きっと

杉浦　はい。

間。

杉浦　キビ畑で恵さんが、「あれカタブイだよ」って教えてくれたんです。

誠治　そう

杉浦　僕らのいるところは晴れてるのに、遠くで大雨が降ってるのが見える。

誠治　ああ

杉浦　東京からしたら、沖縄は向こう側の、遠い土砂降りなんですね、きっと。

誠治　杉浦君は一緒に雨に濡れてくれてるよ

杉浦　・・・

誠治　それだけで、十分さ

杉浦　そうでしょうか・・・デモや集会に行くたびに、話し合いになると、「何もわからん奴が首突っ込むな、ナイチャーは帰れ」って言われるんです。

誠治　ああ、

杉浦　一緒に「ヤンキーゴーホーム」って叫んでたのに。沖縄の人にとって結局僕はアメリカ人と同じなんだなと思う。

誠治　沖縄の悪いとこ出てるなー

杉浦　僕は見抜かれてる気がして、何となくいるだけ、ただ・・・

誠治　見抜くも何も、そんな上等な人間めったにいない、杉浦君に帰れって言ったやつだって、ろくでなしかもしれないんだから、いや、ろくでなしだよ。そいつに言ってやればいい、「お前はキビ倒したことあるかって、俺はあるぞ！」って。きっとぐうの音も出ないと思うね。

杉浦　はい

誠治　Ｂ５２をうるせえ！　と怒鳴りつけた男だよ、杉浦君は。

杉浦　ああ、もう、すみません、

誠治　そういってやればいいさ、

杉浦　はい

誠治　戦争中のヤマトンチュも、本土から来た日本兵も、沖縄を守ってくれなかった、日本は沖縄を捨て石にしたと皆言うけどね、

杉浦　はい

誠治　確かに裏切られたと、思ったこともあった、だけど、そんな人ばかりじゃなかったよ

杉浦　・・・

誠治　島田叡（あきら）知事という人はね、沖縄戦当時、誰も引き受けなかった知事をしてくれた方でね、知事が北部疎開を進めてくれたから生き残れた県民がたくさんいる。最後まで沖縄に居てくださった。今もどこで亡くなったか、わかってないんだ。

杉浦　ええ

誠治　あのころ、若い兵隊さんたちがアメリカの軍艦に特攻したのをどれだけ見たか分からな

い・・・沢山の人が沖縄の為に闘ってくれた。もちろん、日本の為にと思って戦っていたんだろうけどね。

杉浦　はい

誠治　杉浦君だって、こうしていてくれる。

杉浦　僕はそんなに・・・・

誠治　なかなか出来ないことだよ、人のために何かをするってことは

と和子が雨の中小走りで来る

和子　おはようー

杉浦　おはようございます。

誠治　信夫君は？

和子　来てない、もうデモには参加しないと思う。

誠治　そう・・・お茶入れようね

と誠治去る。

杉浦　何かあったんですか？

和子　正社員になってね、建設会社の

杉浦　ああ、
和子　活動してるの、良く思われないから。
杉浦　おかしいですね、そんなの
和子　うん
杉浦　だって僕たちの権利なんですよ、
和子　仕方ない、私がしてるのも、ホントは良くないんだろうけど、今日も黙って送り出してくれたんだから、それで十分。
杉浦　うーん
和子　納得いかないかもしれないけど、ぶつかってたら、もう離婚するしかなくなっちゃう。
杉浦　そっか・・・・
和子　いざとなれば別れるけどね
杉浦　え？
和子　でも、やさしいし、結局、嫌いじゃないのよね、お互いに。だから
杉浦　そんなものなんですか
和子　そんなものなのよ・・・・兄が3人いたんだけど、皆戦争で死んじゃってね、
杉浦　・・・・
和子　母は収容所でマラリアにかかって。
杉浦　・・・・そうだったんですか
和子　私とお父さんが生き残った。信夫はね、兵隊にとられて、外地に

杉浦　ええ
和子　もう、戦死したんだな、ってあきらめてたの、信夫も、沖縄戦のこと聞いてたからあきらめてたって。お互いに、もう死んじゃったろうなって思ってたんだけど、
杉浦　会えたんですね
和子　そう、探してくれてたの、戦争が終わって1年かけて沖縄に戻ってこれた時、収容所を回って。
杉浦　ああ
和子　あ、信夫さんだ！　て気が付いた時ね、嬉しかった。わんわん泣いてね・・・もう、涙なんて枯れ果てたと思ってたのに・・・義理の両親も、家族たち、皆いなくなってて、私がいてくれてどんなにうれしいかって、無事に帰れたら、絶対に結婚しようって思ってたんだって、
杉浦　素敵ですね
和子　素敵ねー・・・、そうだね、素敵か・・・・
杉浦　羨ましい
和子　恵とは、どうなの
杉浦　振られてしまいました、
和子　えー・・・

と、誠治が戻って二人にお茶を。

誠治　和子、朝ごはんは？
和子　食べてきた
誠治　杉浦君は食べる？
杉浦　いや、ちょっと昨日飲みすぎて
和子　お父さん、あんまり付き合わせちゃだめだよ、
杉浦　いえいえ、僕が誠治さんに付き合ってもらってるんです。
和子　そういう事にしておきますか・・・ね、お弁当作ってきたから、お腹すいたらそれ食べれば
杉浦　有難うございます。
和子　あと3人、車に乗せる予定なの
杉浦　あ、すみません、着替えてきます
和子　急いでないからいいの、ちょっと早めにきちゃったから
杉浦　いえいえ、

と、杉浦出ていく
二人はお茶を飲んで。

和子　お父さんがお茶なんてめずらしい

誠治　飲みますよ、たまには。
和子　（外をみて）今日は一日止みそうもないね、雨
誠治　うん
和子　お父さんは、今日は？
誠治　そうだね、気が向けば銀行でお金変えようかと思ってたんだけど
和子　ええ？　もう、並んでたよ
誠治　ああ、じゃあ、今日は一日家に居よう
和子　そうだね、それがいい。
誠治　集会はあれそうかね
和子　そうはならないんじゃないかな、屋良先生が会場にいるから
誠治　東京にはいかなかったんだね
和子　その方が良かったと思う。
誠治　うん・・・ユミの事だけどね
和子　・・・
誠治　和子のせいじゃないよ。
和子　そうかな、私は弱い沖縄を犠牲にして、切り捨てて、基地を押し付ける日本という国は何なんだ、と言ってきたけど、私は・・・私も頼る人がいないってわかってるのに、ユミさんを見捨てたんだって
誠治　あの記事見た時にね、僕は、「なんでユミを殺すんだって、死ぬんなら一人で死ねばいい

のに」って思ったんだよ、残酷でぞっとするけどね、今は。

和子　お父さん

誠治　その時、ああ、ユミのダンナだったという彼も、弱い人間だったんだと気が付いてね、ユミを助けたければ、彼のことも助けなきゃいけなかったんだ、そうしなければ、ユミを助けたことにはならなかった。あの子は本当に優しい子だったから

和子　そんな事

誠治　人を助けるってことは、何て難しいんだろう・・・そもそも自分以外の人間を助けられる人がいるのかな

和子　そうだね

誠治　自分を大切にして、少しだけほかの誰かも大切にする、それしかできないんだよきっと。

間。

和子、日の丸に気が付いて

和子　お父さんそれ

誠治　うん（と、広げる）和子がくれた

和子　うん

誠治　今日から沖縄県か・・・実感がわかないなー、

和子　基地もそのまま、B52も飛び交っている・・・

誠治　うん……

和子　私は復帰すれば、本土と同じように、人権が保障されて、基地もなくなるはずだと思っていたの……、帰りさえすれば……でも、違った……私たちはまた裏切られたんだよ、お父さん……

誠治　これからさ、これからきっと変わっていくよ。新しい沖縄は始まったばっかりなんだから。

音楽。

暗転。

遠くにデモに参加する人々の声。

エピローグ

5場と同じ日。

雨が降っている。

合羽をきて雨に打たれながら、佇む人たち。

手にはプラカード、幕。
そこには「１９７２年５月１５日」「復帰反対」の文字。
波平家の居間では一人、居間で誠治がラジオを聴いている。
そこから聞こえるのは屋良朝苗の声。

ラジオ　「沖縄百万県民の長年にわたる祖国復帰の願望が遂に実現し、本日ここに内閣主催による沖縄復帰記念式典が挙行されるにあたり、沖縄県民を代表してごあいさつ申し上げることができますことを生涯の光栄に思います。私は、いま、沖縄がこれまで歩んできた歴史の一齣一齣をひもとき、殊に終戦以来復帰をひたすらに願い、これが必ず実現することを信じ、そしてそのことを大前提としてその路線に沿う基礎布石、基盤づくりに専念してきた者として県民とともにいい知れぬ感激とひとしおの感慨を覚えるものであります。私は、復帰への鉄石の厚い壁を乗り越え、けわしい山をよじ登り、茨の障害をふみ分けて遂に復帰に辿りついてここに至った県民の終始変わらぬ熱願、主張、運動、そこから引き出された全国民の世論の盛り上がり、これにこたえた佐藤総理大臣をはじめ関係ご当局のご熱意とご努力、さらには米国政府のご理解などを顧みて深く敬意を表し、心から感謝を申し上げるものであります。　それと同時に、きょうの日を迎えるにあたり、たとえ国土防衛のためとはいえ、さる大戦で尊い生命を散らした多くの戦没者の方々のことに思いを馳せるとき、ただただ心が痛むばかりであります。ここに、謹んで沖縄の祖国復帰が実現いたしましたことをみ霊にご報告申しあげますとともに、私ど

も沖縄県民は、皆さまのご意志を決して無にすることなく、これを沖縄県の再建に生かし、そして、世界の恒久平和の達成に一段と努力することを誓うものであります。さて、沖縄の復帰の日は、疑いもなくここに到来しました。しかし、沖縄県民のこれまでの要望と心情に照らして復帰の内容をみますと、必ずしも私どもの切なる願望が入れられたとはいえないことも事実であります。そこには、米軍基地の態様の問題をはじめ、内蔵するいろいろな問題があり、これらを持ち込んで復帰したわけであります。したがって、私どもにとって、これからもなおきびしさは続き、新しい困難に・・・・

と、ジェット機の轟音。
ラジオの声はかき消される。
誠治が空を見上る
轟音はさらに大きくなる
暗転。
轟音の中　ヒヤミカチ節がきこえて。

おしまい

参考文献

『山之口貘詩文集』講談社〈講談社文芸文庫〉